

## 会員からの声②

### 「畜産」研究に思う

田中 義春

道立北見農業試験場 専門技術員

#### 畜産研究・指導の難しさ

現地において畜産の指導は批判があってもほめられることが少なく、研究も同様ではないだろうか。先日、札幌のある会議に出たら、水稻担当の専門技術員が数本の苗を持ってきてこの病気は何だろうと言うのだ。その場にいた専門担当は勿論病害虫や土壌担当専技が集まり、あっという間に原因と対策が練られた。

このようなことは畜産特に、乳牛や肉牛などの大家畜の世界では考えられない。なぜであろうかと追求してみるといくつか考えられる。

第一に物が大きい。我々は具合が悪くなると病院に出かけるが、家畜の場合は農家で診療する。そこには緊迫した技術の検討がなされず、常に個人の力量が優先してしまう。

第二に課程が複雑である。土から草、そして乳へと長い課程を経ていることもあって、原因が解るために時間がかかり曖昧さが残る。指導者も、普及員から獣医、メーカ、コンサルタントとあまりに多く分野も広い。

第三に外国の技術である。ホルスタインそのものが外国種であり、技術情報が怒涛のごとく海外から流れてくる。キララ 397 やハックナインのように根釧農試牛という品種を作ない限り宿命的分野なのかもしれない。

第四に単位が大きい。稲や豆の場合は圃場の一部をみれば、おおよその生育状況が判断できる。しかし、酪農や肉牛の場合、一戸の農家や一頭の牛をみても地域全体の判断にはならない。

#### 酪農経営の大きな変化

以上、畜産指導や研究の大変さを思うままに書かせもらったが、ここ数年は特に時代の変化でさらに難しくしている。それは選抜された農業者と規制緩和によって、従来まで考えられなかった酪農経営が出現しつつあるからだ。

まもなく、個人で経産牛 300 頭、年間出荷 3000 t 以上の企業的酪農家がでてくると推測できる。そこには専門の獣医、栄養コンサルタント、税理士、施設設計などに加えて雇用労働もいる。

また、ある農業者が「新しい技術や施設機械を導入する時、直接海外へ出かけて話を聞く。それでも解らな

ければ技術者に旅費を払って日本に連れてきて指導を受けている。その費用は経営の中から見ると安いものですよ。」と語ってくれたのが印象的で恐ろしかった。

そうなると、今の畜産業とその産業に係わる組織が大きく変わらざるを得ないのではないか。現場に近い農協及びその系統は危機感を抱いて新たな形になるが、普及や研究部門はどうなるか不安である。

#### 今後の畜産研究のあり方

技術においても現在の研究・専技・普及という流れから多様化してくることが予想される。研究も従来と異なり新たな方向が望まれつつあり、私なりにいくつか提言してみたい。

第一に現場で生かせる研究が必要でないか。

農業者は試行錯誤を繰り返しながら新たな技術を次々に確立しており、仲間と情報交換をしながら周辺に波及している。研究員も大いに現場に出て課題を見つけて欲しい。

第二にフィールド研究を積極的に行うべきではないか。

予算の枠組みを変え現場で多くの牛を使って、農業者の協力を得て研究をする。

第三に研究は随時公表すべきでないか。

研究員は現時点の成果を情報交換すべきで、新たに解った事項は即修正する。

第四に数値やデータだけに拘るべきでない。

研究員は数年間、作物や家畜を観察しながらデータをとるが、そこには数値に表れない感覚的な部分をもっと訴えることが重要だ。

第五に研究員はセールスマンであるべきだ。

自分の研究した技術や育種した種子は自ら現場あらゆる手段をとって説明し普及する。

以上、日頃の活動を通して考えていることを述べたがその多くはそれは専技の仕事という意見もある。しかし、畜産の分野ではその枠組みをもっと大きくとらえることが必要ではないだろうか。

いずれにしても、数年前とは異なり農業及び農村現場においては、新たな動きを示している。行政は勿論、研究・専技・普及などの技術屋においても変革が求められている。